

太 棹

昭和十六年七月七日印刷
昭和十六年七月十日發行

(每月一回
十日發行)

昭和十六年三月十八日
第三種郵便物認可

太棹 (第百廿七號)

大改をよんで私の染
目よきを



借竹裏よ
目をおくり



かみ果して
こがゆる



新口志ら
ほろり

第百廿七號

スウハ・アウルシ

蒲田區園町二ノ一
電話 蒲田三六二番

松 幸

すき焼

和洋御料理

淺草公園 (千束二ノ三四)

牛鍋本店

電話根岸 (87) 〇三八〇番
二〇〇〇番

風流・金ぶら・茶漬

【美地旬】

去月屋

新橋二ノ八
電銀二〇八

陸路太夫改め
二代目竹本三五太夫



竹本七五三太夫は本名米田久松、明治廿九年五月六日京都竹野郡徳光村の出生、大正四年九月三代目竹本越路太夫の門に入る。一時新義座に入座せしも同座の退轉と共に文樂座に再出演十六年六月二代目七五三太夫を襲名し同月文樂座にて鶴澤綱造の絃にて合邦の奥を語り極めて好評を博す。

新義座時代には十四年一月五日日光丸にて神戸出帆、青島、竹子、濟南、天津、北京等二ヶ月に亘り、乙女文樂を引具して慰問、杉山部隊長より感謝狀を授與された。

趣味は狂歌、刀劍にて、又創作には金色夜叉、櫻井驛、赤城嵐、二人三脚等あり。

初代七五三太夫は文久四年大阪市南区北炭屋町に出生、明治十一年二代目越路太夫後の攝津大塚に入門、同四十四年八月三十日歿。
(四十八才)

め改夫太子の津本竹
夫太濱本竹目代五



大正五年五月十四日大阪市住吉區長峽町に出生。

父竹本津太夫に師事し大正十四年大阪因會へ入會。

昭和六年四月大阪文樂座にて初舞臺、芦屋道滿大内鑑「保名物狂」の黒右衛門を勤む。此時の保名は此頃故人となつた豊竹駒太夫にて、三味線は鶴澤友次郎。

昭和十二年一月入營、引續き應召となり、昭和十五年九月廿七日芽出度歸還。

昭和十六年四月五代目濱太夫を襲名、文樂座にて披露し妹背山婦女庭訓「山の段」の久我之助を野澤勝平の絃にて勤む。雛鳥(南部太夫、重造)大判事(津太夫、寛治郎)——津太夫病氣にて大隅太夫代役——定高(古鞆太夫、清六)

駒若太夫改め
四代目豊竹司太夫



豊竹司太夫は三代目司太夫に
師事し、幼名小司太夫と名乗り
三代目歿後七代目豊竹駒太夫の
門下となりて駒若太夫と改めそ
の將來を期待されてゐた處、今
回四代目豊竹司太夫を襲名、四
ツ橋文樂座五月興行に於て「關
取千兩幟」の猪名川の役にて襲
名披露を行ふ。

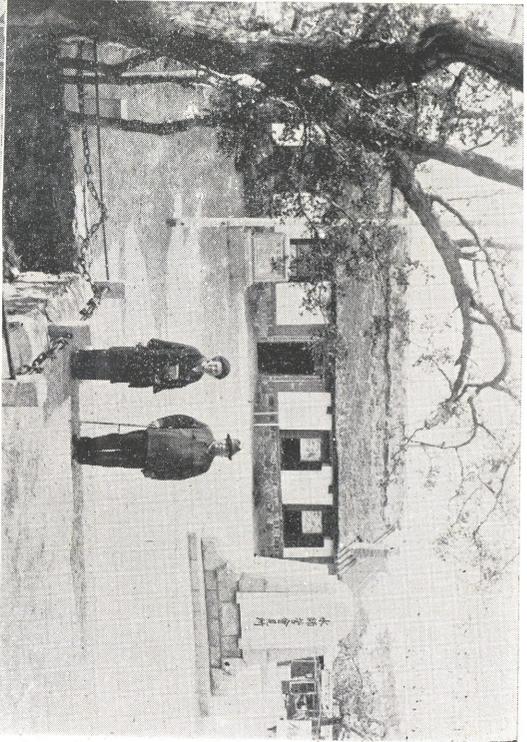
因に三代目司太夫は初代呂太夫
の門下で、七代目駒太夫とは駒太
夫の富太夫時代に呂太夫の預り弟
子となりし事より兄弟弟子の關係
がある。

神馬里芳氏夫妻

(朝鮮の旅より)

乃木將軍
スラツセ
九爾將會
見の地、
一とも
古木は例
の褒であ
ります。

(神馬里
夫妻は)



餘年前迄は松花江岸に半農半漁の民家數軒が點在してゐたのでありますが明治卅一年五月廿八日東清鐵道建設本隊が到着した日をハルピンの誕生として、爾來二十年間二億六千萬圓が都市建設に費され今日の大ハルピンをなしたのであります。人口五十餘萬。寫眞は觀光バス前の一行、後列右より二人目神馬千代吉氏、前列右より二人目が里芳女史。(寫眞下)

長谷川八十八治氏

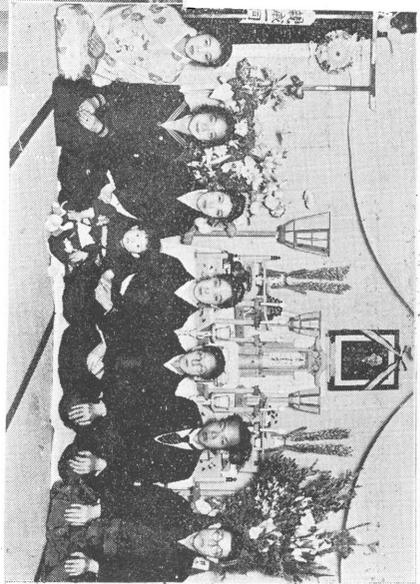
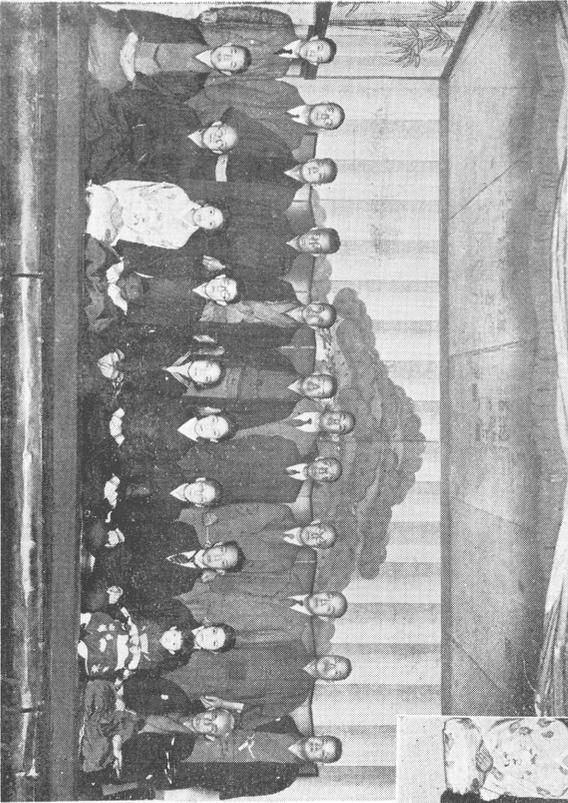


神馬里芳さんは別掲の通り五月十九日出發夫君千代吉氏と共に滿鮮旅行の途にのぼられました。留守中五月廿六日と六月四日とに二人の店員が死亡、出立前の五月四日にも一人死亡したのでありますが、かくて六月六日歸京旅装を解く違もなく今度は令弟長谷川八十治氏が永眠せられ、この打續く不幸に里芳さんの愁嘆の程お察しするに餘りあるものであります。

八十治氏は神馬家の爲めよく働いたお方で工場なども見まはり同家重要な人でありました、享年四十三。なほ神馬家では六月十五日出入長屋の人々を招き、しめやかに慰靈祭を営み亡きこの四人の冥福を祈られたのであります。

井上泉氏追善義太夫會

前號既報の如く五月廿三日不歸の客となつた井上泉氏の爲め、その追善義太夫會が盛會に催はされましたが寫眞は當日の記念撮影であります。



上は祭壇前に於ける遺家族。
 下前列右より猪谷銀水、井上氏
 息夫人、井上氏息、井上氏未亡
 人、同愛嬢、同愛孫、親戚二人
 齋藤山生、安藤都竹の諸氏。
 後列右より坂本あるを、栗原千
 鶴、伊藤松鶴、中澤巴、星野桔
 梗、和田春和、白井清華、竹本
 都太夫、田中煙亭、宮本百塚、
 安藤都昇、川口子太郎の諸氏。



太 棹 第百廿七號 目次

亡くしてぞ今は……………	西尾福三郎……………(二)
新文樂の黎明……………	紅雨莊主人……………(五)
土佐太夫の思ひ出……………	齋藤拳三……………(九)
邦樂年表に就て……………	三五郎……………(三)
白茅亭雜記……………	富取芳河士……………(一八)
ラジオ淨曲漫評……………	金王丸……………(一九)
女義隨評……………	内田三千三……………(三)
泉老人と批評……………	内田富太郎……………(三)
太棹社彙報……………	……………(三四)
會報と消息……………	……………(一八)

表紙・目次カット…………… 齋藤清二郎
 本文カット…………… 宮尾しげを
 口繪——竹本七五三太夫・竹本濱太夫・豊竹司太夫・神馬里芳氏夫妻・長谷川八十治氏・井上泉氏追善義太夫會



亡くてぞ今は

— 文樂座 六月興行 —

西尾 福三郎

角太夫と叶太夫、それに綱造の復歸が孤域落日の文樂に果してどれだけの生彩を興へるであらうか、と云ふ事が今月最大の興味であつた。

それと共に今後名實共に一座の總帥たるべき古靱太夫が、この重大な再出發に際して何んな演目をもつて臨むかと云ふ事も期待されてゐた。ところが俄然白石揚屋と發表された時には尠らず意外な氣がした。今度はこの人の世話物を、と一部に期待された點に應へた意味は一應肯づけるが、それにしても大して名作でも名曲でもないあの揚屋を、この人が何う苦心して語つてみた所で大抵範圍が知れやうと云ふものである。

とにかく古靱は揚屋を演し物にした事は失敗である。二つ目の陣屋や切りの合邦に比してこの人の語り物としての魅力の無い點が致命傷である。しかし遺がにこの人の事だから一字一句忽にせぬ巧緻な表現の妙は、宮里宮柴はもとより、たつた數言しかないやり手婆を語つたゞけでその性格を浮き彫り

のやうに描き出してゐた。間の正確な事、息の變り目の鮮やかな事は今更ら乍ら云はずもがな、末段大惣物語りの條りはこの人としては眼目のきかせ所で、その溢れるやうな滋味は本文の意見上手な親方以上にいつも乍ら結構なものであつた。が斯くの如き名表現をもつてしても猶且つ大惣物語りに可なりな退屈を感じざるを得なかつたのはこれは作品のせいである。奥州訛りの巧さ——と云つても、これは言語學上の奥州訛りではなく、淨曲のテクニクの巧さであるが、もつて範とすべきであらう。だが今後はより一層演目の選定に審重を期して貰ひたい。

陣屋の段は物語りを大隅が一人で受持ち、首實驗を織太夫と相生太夫が例によつて一日代りで務めてゐる。大隅は今度から清二郎を相三味線にしたが、このコンビ何うやら面白い味が出さうな氣がする。三段目の堂々たる風格を出すにはまだ遠いが、榮三の熊谷の落着きと相俟つて何となく大きなドツシリとした味が出てきたやうだ。だが眼目の淺ましきは

武士の……この一句の表現にもつと／＼求めたいものがあつた。首實験は織太夫病休で二度共相生太夫吉五郎できいたが、これはこの人達のやうな細かい持味の組合せには向かないものだ。殊に末段彌陀六が出てからは、これからと云ふ所で彌陀六の爲に却つてよりきらられて土俵を割つたやうな感じだつた。殊に「ホロリとこぼす……あたりの情が何うも一段の趣致をこの一句にこめたやうな色合ひには受取り兼ねた。元來織太夫とこの人とをいつも同一の演し物で競演させる方法に私は根本的な無理があるのだと思つてゐる。

人形では榮三の熊谷が「心にかゝるは母上……でテラと相模の顔を見たり、小兵吉の藤の方が「有合ふ刀……で熊谷の大刀を使ふ所など、何れもこの人達の解釋——と云ふより人形獨特の持味を面白く味ふ事ができた。相模は珍らしく紋十郎が受持つてゐたが、いつも文五郎を見なれた眼にはこれも一つの變化だつたが、それよりも出遣ひ好きな文樂が、しかも大派手なこの場を今度に限つて黒衣で出した事が大きな變化だつた。その反對に、いつも黒であるべき合邦を今度は被露狂言と云ふ所から出遣ひで出してゐる。いつもよく云はれる事だが一貫した演出意圖をもつて、この黒衣と出遣ひの古來からの約束をもつと嚴重に守つて貰ひたいものである。

次は問題の新作小鍛冶である。

これについては二三の記事を他誌にかいたから今更らそれをくり返したくないから略しておく。戯曲としての弱點は稻

荷明神一人が極端に活躍して他は殆んど役らしい役になつて居ない點が不満である。振り猿は猿之助主演の際には花柳壽輔の型だつたのを今度は山村若子の型によつてゐる。人形は榮三の明神が弱朽共を憫殺したやうに大車輪の活躍で、光之助の左手に榮三郎の足で氣を入れて遣つてゐる事が分かる。殊に榮三郎の足が大きな努力である。新作としては先づ／＼成功の方で、それも大部分は道八の曲、山村の振、榮三の人形この三つの力で、作品そのものゝ魅力としては云ふべき點が無い。揚屋や陣屋ではぢつくりと構えて動かなつた榮三の人形が、小鍛冶ではそれこそ獨樂の如く動いて老來ます／＼健康な所を見せて貰つたのは心強い限りであるが、しかしかうした物に無理をした餘り肝腎の型物の大役に事缺くやうな結果にならない事を希望しておく。

切の合邦は叶太夫と寛治郎、角太夫と廣助、以上を一日代りとして前半を受持たせ、後半を陸路太夫改め二代目七五三太夫の披露として、それに返り咲きの綱造が絃を受持つてゐる。

叶太夫、角太夫共に何と云つても傾く年であるから他の現役太夫に比して痛々しい許りに老衰感が目立つ。將に素破鎌倉と云ふので狩り出された軍友會と云つた形で、組上に乗せなるべく餘りに氣の毒である。

それに角叶共に、老人らしくサラリとした草書風な語り流しであるに引かへ、後半が若手の七五三太夫と云ふので、綱

造のあの健腕に擒縦自在に操られてへト／＼になる迄語りつくす。この前後の對照が餘りに極端で合邦としての一貫した氣分が全然出てゐない。殊に綱造と七五三太夫との組合せは恰で横綱と十兩力士の取組みみたいで、さらでだに達者過ぎる綱造が、必要以上と思はれる迄に激しく弾きまくるのに齟弄されて七五三太夫があつた體力一杯に語りまくる。よいも悪いも全く太夫と三味線の死闘をみると云ふより、三味線に操られて腸まで吐きさうに奮戦激闘してゐる七五三太夫に、むしろ或る悲壯なものをさへ感じさゝれて、それを又悠然と受けてビシ／＼きめつけてゐる綱造の絃に、合邦を弾くと云ふより、何かなしに若い太夫を鍛へる爲に力一杯操つてやつてゐるやうな心構えが感じられて、この合邦は、前後不照應の點、又、切りの絃と太夫の不相應の點、何れの點にても恐ろしく妙な合邦になつてしまつた。

こゝに於て、かつて今春放送された事のあつた亡き津太夫の合邦を思ひ出す事しきりなるものあり、又、相生太夫の陣屋の切りをきいても、彌陀六の出になると、亡き津太夫のあの息の太い彌陀六が又もや思ひ出されて、事毎に亡き人へ對する感慨更らに切なるものがあつた。

以上の外序に忠臣藏と云ふ題名で、本下と八段目の道行きを喰つけて出してゐる。歌舞伎の方では稀にかうした變則な竝べ方をする事もあるが、いかにも窮餘の策らしくて何うにも褒めやうがない。

長老新左衛門の絃もちよつびりきかせるだけで、これでは折角の名手も可惜寶の持腐れである。そして旅路の嫁入りを角太夫、叶太夫の交替で戸無瀬、南部太夫、伊達太夫の交替で小浪と云ふ役割りになつてゐる。

無慘やな老人二人共南部と伊達に喰はれてしまつて慘憺たる母親を語つてゐる。廣助の絃が暫らく振りて健在を示してゐるのが耳に残つた許りで、道行きの叙述もこの頃は特急列車か飛行機並にスピード化されて、味も素つ氣もなくなつて行く。その中で知るや知らずや、正々堂々と「しゝきがんかう……と無遠慮に謳はれてゐるのだから頗る面黒い。

かくて改組第一回の文樂は幾多の問題を胚んだまゝ新秋まで持ち越される事となつた。

新橋演舞場に於ける文樂座引越興
行は一回より五回替りまで次號の
誌上で齋藤拳三氏に細評を願ひ
する事に致しました。

太 棹 社



新文樂の黎明

紅雨莊主人

◆浪花節は此頃往々「語る」と云つたりするが、本來は「讀む」と云ふらしい。講談も「讀む」である。義太夫は筑後掾の昔から「語る」であるが、其語る形式は時代と共に變化し、且後戻りしたり、又元へ歸つたり、いろ／＼して居る。

◆いつか何かへ書いたと思ふが、筑後掾時代の語り方は、加賀と播磨の折衷に聲に表裏を附け、など云ふから、今よりも一層聲曲味の勝つたもので、恐らくは謡曲のやうに、朗々たる聲を出し、大まかに、但し開合は謡曲よりも一層明瞭に詞はやゝ寫實的に、すんなりと流れるやうに語つたものであらう。小音の政太夫が、情を出す事に苦心してから、淨瑠璃は一步内容的に進んで「語る」といふ意味が深くなつたが、小音と云つても程度の問題であり、依然として聲曲味の勝つたものであつたらう事は想像に難くない。かくて淨瑠璃は聲曲的には色々の旋律や拍子の發達となり、「風」など云ふ特殊な型式をも残すに至り、劇的には愈々表現の微妙巧緻を加ふるに至つたものと思はれる。淨瑠璃といふ一種の樂劇に於て聲曲的な曲と、劇的表現の勝つた曲とが、或程度迄區別出來

ると共に、時代により、全般の淨瑠璃に聲曲味が濃厚になつたり、反對に表現方面が重視せられたりして、それが交互に交替消長するやうである。かくて淨瑠璃は唄ふべきでないといふ主張と、淨瑠璃は表現一方では音曲にならぬと云つたやうな主張と、極端な二つの見方が互に争うて盡きる事が無い。そして今日迄の所では、聲曲の方面は旋律は益々細かく發達したが、拍子は段々痕跡を薄くし、「風」と云ふやうな型が漸次失はれつゝある一方、内容的には「語る」方面が偏重せられて、聲曲的陶醉といふ方面が輕視せらるゝと云つたやうな状態にあるやに見える。誠に今日の淨瑠璃は、當てたり乗つたりして大まかに運ぶ事が厭がられて、比較的自由な小節で、なるたけ糸に付かぬやうに、小味に小味にと持つて行つて、表現は恐ろしく理屈つぽく、面白く樂めるものから、深遠にして容易に解すべからざるものに進んで來たやうである。當然の結果として藝は小さくなり、素人と玄人との距離が接近し、六十年鍛鍊の技藝者が、馳出しの評論家から語り方の技術迄も差圖せられる状態になつた。

◇此様な状態は、藝術として進歩であるのか、退歩であるのか、それとも形式的に進歩して内容的に退歩したのであるか、院本が讀め術語の十も覚えればすぐ太夫が教へられるやうなものか、藝と云へるのか、抑もまたさう思はず程に太夫が無力になつて居るのか、其邊の事はよく知らぬ。併しながら様子は一方に行くだけ行つて、そろ／＼他の一方に戻らんとしつゝあるやに見える。少くとも老大家の相次ぐ他界によつて、急速に變化しつゝあるのではないかと思はれるのである。

◇物故した老大家のうち、鑊太夫は若い時には大音の美聲家であつたが、後年は聲が出ず、無理な聲使ひで聴衆を惱まし自分も得意を封じられてあまりばつとせぬ「語る」方向へ逼つて居た。駒太夫は艶語りと云はれたが、實際は「語る」太夫であつたから、後年其聲と腹とを失つても、最後迄人が喜んで聞いたが、年齢から云つて無理をしてゐた。土佐太夫は大隅の三枚目として艶で全國に鳴り響き、晩年艶の大部分を失つたが、枯淡味を加へ、しかも其描出する女は若く美しく、表現する人物は活々としてゐた。津太夫に至つては若い時からあの聲であり、しかもあの太い毛先の切れた筆が其描く淨瑠璃に適して居た。土佐太夫と津太夫とはまだ／＼語れたのに惜しい事であつた。これらの太夫が昨冬から今春にかけて慌しく相次いで物故し、残るは古靱太夫だけになつた。

◇暫く古靱太夫を預つて、外には大隅太夫と文字太夫、和泉太夫、今度遣入る叶太夫と角太夫とは別儀として、從來の文樂

を背負ふ者は呂太夫、織太夫、南部太夫、相生太夫、伊達太夫、まだ馴染薄ながら七五三太夫(舊陸路太夫)、其他源太夫、文太夫、司太夫(舊駒若太夫)、津磨太夫と下つばの方迄見渡すと、寧ろ聲の有るのが多いやうである。若ければ普通聲も若く、第一若い癖に聲の無いのが滅多に太夫にもなるまいから、文樂は若返つて、あな六かしのは皮肉淨瑠璃から、樂める聲の淨瑠璃になりさうである。此事は必ずしも私の發意ではなく、或席でも同じやうな話が出た。大家が次ぎ／＼に仆れ、文樂全滅とも考へられるが、又文樂は若返るとも考へられる。老人には老人の藝があり、若い者には若い者の藝があり、兩者を混同して、潑刺の藝を老成味の足らぬ故を以て捨て去らぬ事が望ましいと思ふ。

◇津太夫他界の跡は當然古靱太夫が紋下となる澤であり、今迄にも既に紋下を以て呼んだ人さへ有つた。津太夫の藝は義太夫節を最も原形に近く傳へて居ると云はれるが、寧ろ一般風でなく、従て、紋下の藝風が即ち淨瑠璃の行くべき方向であり斯道の家元であるといふ風には誰れも思はず、従て津太夫がどう語らうが、それは津太夫の藝として人が見るから外に影響は少いが、古靱太夫の藝風は今でも已に一つの標準視せられ、規格視せらるゝ風があり、中には之を唯一の規格であり、標準であるかに考へる人なども有るらしく、これが紋下になると其一語の語り方一句の云ひ方が直に滿天下に影響を及ぼし、其規格に合ふか合はぬかと藝の甲乙を極める標準

となるに至る虞れがある。敢て之を「虞れ」と云ふ。それは古
鞞太夫が如何に名人でも、淨瑠璃が極端に規格にはまり、型
がきまつて、誰れでも古鞞太夫の様な節廻しをし、誰れでも
古鞞太夫のやうな語り口をする日になると、文樂はとて三
時間も四時間も聞いて居られぬものとなる。謡曲にさへ幾つ
も流派がある。まして此藝は個性があるのがよいのであり、
色々あるのがよいのである。これは單に變化を求めるといふ
だけでなく、藝道深遠にして、とても一人で釋迦と孔子と楠
正成と其他とに同時になる事は出来ぬからである。内科、外
科等々の有るのがよいのであり、且つ醫學が進む程當然の事
なので、偶々内科の先生が名醫だからとて、外科の先生迄そ
の調子でゆつくり考へておられては患者が死んだりする。栖
風もよい、大觀もよい、玉堂もよい。よい物はたゞ一つ、な
どと單純に考ふべきでない。

◆古鞞太夫は巨匠である。彼れによつて近代に於ける名人の
一人が作られつゝある。「作られつゝある」に不足な人もあ
らう。併し私はさう考へる。恐らく古鞞太夫自身さう考へて
努力を續けて居ると思ふ。古鞞太夫の藝はよく「理智的」
だと云はれる。理智はバツクであつて、出て居る所は寧ろ
「説明的藝風」とでも云ふべきものであらう。「直接表現
的」の對語である。畫にも同様の事がある。こゝに山があり
ます、山のこちらは森であります、森の中に家があります、
そこに人が立つて居ります、人は家より大きくては困りま

す、といふ工合の畫と、さつと刷いた、馬と人間と同じ位
の、どうかすると馬の足が二本か三本しかない畫と、そんな
區別がこれである。歌にもあり、文章にもあり、其他何に
もこれがある。無論説明的だから悪いといふのではない。直
接表現的に描いた傑作も多く、説明的に描いた傑作も少くな
い。同時に、駄作凡作は兩方とも無數である。どちらを自分
の藝に採用するかは、其人の性分である、そしてそれだか
ら、それに限り、それを條件として兩方乍ら認出来るので
ある。何とならば藝術は、藝術家自身の持前を磨き、それを
總動員して始めて出来るので、他人の持前を基礎にした藝を
いくら眞似しても、眞似に成功すればする程益々藝でなくな
る。その例も亦どこにでもある。

◆古鞞太夫は、腹が強くなく、聲もよくない。其代りに立派
な人間と、強烈な研究心とがある。彼れの藝風は此持前から
發足するので、當然の結果として今の藝境になる。この藝境
は、自己の持前に發足して、鍛練工夫を加へたものであるか
ら、本物なのである。彼れは鍛練工夫を怠らぬ。外形から云
へば「風」正しき細密描寫である。古鞞太夫は「語り過ぎる」
と云つて一般には不満を買つて居り、反對に一部では同じ理
由によつて神様にせられて居る。しかし此頃になつて段々語
らぬ工夫をしつゝあるやに見えるから、古鞞太夫の語る方面
にのみ感心して居る人々は油斷がならぬ。其語らぬ工夫が完
成した時が古鞞太夫の藝の完成した時で、それが進むに従て

藝に神韻漂渺の趣を増す。此時が「名人」である。名人が「作られつゝある」と云ふのはこの意味である。古靱太夫ヒイキの人の褒め方の中には、女の嫋嫩を褒めて、「どうも黛の書き方が何とも云へぬ」と云ふやうな、本人を苦笑させはせぬかと思ふやうながある。聲の無い爲めに苦心慘愴して獨特の小節などにしてあるのを見て無闇に褒めると、虫齒の爲めに入れた金齒を褒めるやうな結果にならぬと限らぬ。個性に基礎を置かぬ藝の薄弱な事は古靱太夫と區別が付かぬ程の織太夫にそろゝ行塞りが感ぜられ、古靱太夫の發聲と節辭を眞似るらしい小仙にはほの臭い臭氣が付いて來たのでも知れる。聲の有る人は有るやうに、無い人は無いやうに、自分の淨瑠璃を語るべきであり、古靱太夫が絃下になつたからとて、古靱太夫と同じ道を皆が歩るゝは、それこそ文樂が減びる。同時に甲の藝の標準で直に乙の藝を見る事の危険にも注意を要すべく、若し一色しか分らぬ場合にはもつと分る迄待つもよい。其分つたと思ふ所も案外悪い所斗りを見て感心して居らぬとも限らぬので、其邊仲々六かしい。何とならば、分り易いのは多くは目に付く點であり、目に付いたり耳についたりする所は大抵はよくない所だからである。

(一六、五、一〇)

☆ ☆ ☆

淨雲會

淨雲會は第十二回を初夏の大會として六月廿七日午後二時より左記番組のもとに並木俱樂部に開催した。折しも東上中の豊竹古靱太夫を始め、織太夫、團六等が聴きに來て正面別席に襟を正してゐるのに一同大に緊張、巽氏などは寺子屋を「共に」まで十五分ばかり語つて審査會を思はしめた。晋水氏が旅行中にて缺演の爲め一司氏が代つて寺子屋の奥を綱助の絃で熱演、大切の七段目同じく晋水氏受持ちの重太郎を子太郎氏が代演した。

野崎(お光、文盛、久松、子太郎、お染、都竹、久作、其角、絃、都太夫)鮎屋(柳光、佳照)安達(都昇、都太夫)太十(其角、松四郎)酒屋(都竹、都太夫)千兩(巽、晋水、和光)吉田屋(光玉、佳照)合邦(中次、和孝)寺子屋(巽、絃平)新町(子太郎、綱助)宿屋(文盛、絃平)大切忠七(由良之助、光玉、重太郎、晋水、彌五郎、其角、喜多八、都竹、おかる、都昇、力彌、中次、平右衛門、柳光、絃、佳照)

二代目鶴澤清六浮かぶ

向島に初代鶴澤清六の塚のある事は數年前の誌上で報道したが、今戸長昌寺には二代目の墓碑があつて、この墓碑は「石井家の墓」とあるので二代目鶴澤清六の墓と是一寸氣付かれない、それは石井うたといふ同姓の人が最負目で建てたのだが、藝名を表はさなかつた爲めか、うたさんはどうも身體がすぐれないといふので、今度東上中の鶴澤清六を訪ねて供養を申出た。清六氏も非常に喜んで、五歳迄故人に愛されたといふ水元の妻女、酒井さん、それにうたさんとで供養する事になり、これを機に墓碑も二代目鶴澤清六と改むる事となつた。



土佐太夫の思ひ出

齋藤拳三

竹本土佐太夫が四月二日、天下茶屋の自宅で安かな大往生をとげてからもう百ヶ日になる、死の前日は急逝した駒太夫の代役をする伊達太夫に三時間もみつしり新口村の稽古をし、夜は相三味線吉兵衛とBKの義太夫名曲選に語る大文字

屋の稽古をする目を打ち合せ、其の翌日は恩師の臨終とも知らずに稽古に來た伊達に其の一二時間前まで新口村の孫右衛門の役の性根を話して聽かせて居たのだから、全く藝だけに生きて居た土佐太夫らしくつて、私は涙の中にも義太夫節の末期が生んだ巨匠の臨終に溜飲の下る思ひがした。

井上伊三郎氏も東劇の支關で逢つた時「立派な大往生でした」と云つて居たから、土佐最負としてはおそらく思ひは同じであらう。

土佐太夫とは義兄弟の伊原青々園氏は家事上の私用で土佐太夫と會見しても大抵最初の一日は義太夫の話でおしまひで、二日目では用がたりなかつたそうだ、其れ程土佐太夫は藝談好きであつた。

筆者などは自分では土佐最負のつもりだが、何だか最負にされた様な感じがして居る、でポツ／＼憶ひ出すがままに書いて見やう。

土佐太夫がかつて私に不氣嫌になつた事が唯の一度有る。其れは「なぜ私に義太夫を語らないか」との質問だつた。私は「義太夫は素人がいくら勉強しても自分自身満足のいく様に語れぬから」と云ふと、彼は大層不満足な顔をした。これは常に素人の中から有望な太夫を捜し出そうとして決して希望を捨てなかつた土佐太夫として充分うなずける話であつた。

彼はこうした、筆者などからは絶望的に見へる義太夫道に常に明るい希望を持つて居た。土佐太夫は常に大衆から賢しこ過る策師の様に見誤られてゐたが、伊達と云つた壯年時代は知らず、私の知つてる土佐太夫になつてからの晩年は非常に親しみ安い好々爺であつた。

或る時彼はこんな質問をした、東京のお素人の人で立派な

太夫になる素質の人はゐませんかと熱心に聞くのである、翁は三四年前に此地に現れた化物をまだ東京に求めて居るのであつた、私が「土佐會のお方は知らないが楽しみに語るお稽古をしてる且那藝に今時其の様な人はないだらう」と云ふと「でも都太夫の息子は太變い、と米太夫が云つて居た」と云ふのである。これには私は少なからず驚いた、其れは當の相手が私の最も心がかかりな、落語講談や人形淨瑠璃の様な次第に衰滅して行きそうな藝界に、哀れな自分自身の後事を托すべく成長と完成を念じて居る安藤鶴夫なのだからまごつかざるを得なかつた。

でも言下に私は「都太夫は御師匠さんと同じく息子は藝人にしない爲、大學を卒業させたのだから駄目です」と答へると「大學を出てはもう斯の道へは入らんかなあ」と云ふのである。

杉本英氏も誰かの御注進に依つて土佐太夫のお見出しに預つた一人であつた、家へ来て語つてくれと云はれて年少氣銳の氏は新左衛門の糸で鰻谷を一段語つたのだ、土佐氏は紋服で門口まで出向へて、吉兵衛、鍛太夫一門がずらり居ならんで居てゐるへたと云はれて居る、一段が終ると別席に膳部の用意が丁寧にしてあつたが味も解らなかつたと氏は謙遜して語られた。

以上の事から見て土佐太夫の隠退は少々悲劇であつた、翁は淨曲協會の大成を過大に空想したのが一因になつて居た事

と思ふ、好事家は澤九似氏あたりが無謀な拍手と聲援を贈つたのも一理あつて此れも是澤小百合太夫らしかつた。

私は藝人の隠退はどの角度から見ても悪いと思つて居るが其の内では土佐太夫が一番罪が軽いと思ふ。

斯道かくの如く衰へれば大家の晩年は皆寂しい、土佐も一般からは樂隠居して悠悠自適風流三昧に暮して居たかの如く報ぜられたが、決してそうで無かつた事は筆まめな翁が筆者にあてた百九十通の通信が物語つて居た。

「此の頃は毎日團司が京都から櫻時雨を習ひに来るので一日愉快だ」とか「伊達太夫と雛昇に毎日稽古をして居るから退屈しない」とか、やはり彼の晩年も義太夫と四つに組んで居る時が一番樂しかつたのである。

「中澤巴氏が下阪するから共に土佐會を聴きに來い」と私に下阪をうながす事も再再であつた、特に面白かつたのはBKから藝談を放送するから、放送局へ同行する様にと云つてBKからの招待状を郵送して來た事があつた、其の時間がすぐ夜行で八王子を出發しても間に合はない時間だつたのは啞然とした。

隠退後の師が先年松竹から若手一座の助演に上置として東京へ一度臨時出演しないかとの交渉を受けた事があつた、此の時毅然として、一笑に附してしまつたのは彼の知己眞鍋博士と、愛弟子竹本伊達子であつた、翁は伊原博士とか安部豊氏とか所々の知己へ相談したらしかつたが、一番うるさ型の筆

者には最後に意見を出したらしく、十數人の人の賛否が書いてあつたのは非常に親しみを感じて嬉しかつた。

土佐太夫の手紙は小供の時紙屋に奉公した事の有る人だけあつて實に結構な色々の土佐の和紙を吟味して使つたものだけだつた。青、赤、黄、緑等の和紙へ毛筆で達筆に認めてあつて時々一枚の大きな紙へ書いて其れを器用にたんで其の折り疊の表紙が宛名になるたのみ方であつた。

どんな面倒な藝の質問をしても必ず四五日目には返事が來た、筆者が故野澤金造の墓標の揮毫を依頼した時などは一日に四通の返事が來て少々驚かされた。

翁は亦いくら長文の手紙でも二錢切手を二枚きり張らないので末納料を取られる事は毎回であつた、筆者の家庭では「亦御氣に入りから罰金手紙が來た」と大喜び、大笑ひであつた。

其の藝鬼土佐太夫も鶴澤友次郎が一度隠退後再出演して僅か二度の芝居を務めただけで再起不能？となつたのを見て以來、すっかり高座を斷念してしまつた。筆者が自宅で語つてくれれば即日下阪するからと云つても自分は晩年を遊ぶつもりだが吉兵衛はそうでないからとの理由でキツパリ斷つた、然し教へる事は死ぬまで出来る「知つてる事は何でも教へるから質問してくれ」と其の終りに丁寧に書き添へてあつた。

總明なる藝愚！私は不再出の藝人、と限りなき愛着をおぼえるのである、彼が相三味線吉兵衛を賞讃する事は非常な

ものだつた。

現今の三弦では吉兵衛が群を抜いてゐる、吉兵衛なら引合せなしにどう工夫して語つても安心である、人物も立派な男だから會つて御覽と云ふのが常であつた。

筆者如きが縷説するまでもない三絃は夫婦よりむしろ君臣とも極言すべき犠牲的精神を藝の根幹とすべきである。

土佐太夫吉兵衛は、古靱太夫清六と共に相三味線の最後を飾るべきものであらう。

土佐太夫の藝は晩年程よかつた、特に隠退興行に語つた四種の世話物は大正、昭和に於ける世話淨瑠璃の最高峰であつたが、彼の大成が壯年時代より血と涙の修業を續けた三代目大隅の影響よりもかへつて晩年文樂入座以來受けた、外様大名抜ひ、——四面楚歌の繼子抜ひの忍苦と攝津大掾の影響を受けてるのが私には興味深い。藝談と云へば何事も卒直端的な翁が一度事師匠大隅の事になると話すのをいやがる傾向が見へた、一方攝津大掾の話になると彼は愉快そうに絶讃するのが常であつた。

義太夫人と云へば餘りにも排他的である中に大掾が四面皆敵である。新加入の大隅の藝を認めて居る床しき紋下の態度に驚異の眼を見張つて其の人格に眞の師を見出した事を私は容易に想像する事が出来る、翁は云つた「自分より下の太夫の藝を立聽して参考とするなんて其んな偉い人は始めてです」と。

彼の藝風が益々上品になつていつたのは全く大塚の影響であらう、然し彼が青年期よりの難行苦行の練磨を経て修得した大隅一流の寫實的藝風はやはり根強くも、無意識に心の奥に生い繁つて六世土佐太夫風とも云ふべき言葉語りの妙を完成したのである。

寡黙な古鞞太夫は或る時私に云つた。

「言葉尻りを締めて泣く處だけは故大隅師匠に似て居ます」と、

ここに翁は明治期の兩巨匠の長所を過然にも自家樂籠中のものとして一流得自の藝風を完成したものと思ふ。

あへて筆者は彼を六代彌太夫或は津太夫以上の太夫と結論する所以で有る。

大正八年越路太夫最後の東上素淨瑠璃評に岡鬼太郎氏は言葉では伊達の方が一足お先に卒業したと評した、筆者も全く此の點は同感である。

翁の至藝は全一段としてはレコードにさへも残つて居ないのである、一種の言葉語りであつたからサワリ位を一二枚吹き込んだものは全く片鱗さへも窺ひ知る事が出来ないのである、隠退直後或る最負から十段だけ録音すると云ふ企畫があつて筆者は極力此れを勧めたが何かの理由で實現を見なかつたのである。

東京には土佐太夫を賞讃すると義太夫通で無い様に思はれそうな傾向さへうかがはれて筆者には不思議でならないのである。土佐師の事はまだ書きたい事が澤山ある、いずれ亦其の機がある事と思ふ。

京城素義審査大會

(引續き人形淨瑠璃大會開催)

昨年東京に於て結成された邦樂協會に倣へ、朝鮮音樂界にても新體制の國策に順應して此大同團結の準備を進めつゝあつたが、總督府學務局を始め、警務局、朝鮮總力聯盟文化部、同放送協會等の協力に依り朝鮮音樂協會が設立され本年一月廿五日京城府民館に於てその發會式を舉行したが、京城素義聯合協會々長志信太郎(紫扇)氏は協會の理事に就任と共に同會の邦樂部長、同義太夫科長兼審査委員長に推薦されたので、これを機會に「從來の素義界の舊狀に更に數歩を進めて眞に鮮滿淨友一如を具顯し、以て兵站大陸の情操藝術界に翼賛奉公の實を擧げた」といふ趣旨の下に今秋九月十七日より三日間京城府民館講堂に於て審査大會を開催する事になり、審査員として大阪伊東柳平、奥田利生兩氏の快諾を得て着々準備中であつたが、出演申込みは六月三十日を以てメ切り。なほ右審査大會終了後引續いて廿四日より五日間同館にて乙女文樂人形淨瑠璃大會を開催。出演者は出演料を協會へ寄附する事になつた

「邦楽年表」に就いて (一)

三五郎

頃日偶々小閑を得たので、故黒木氏編纂の「邦楽年表」義太夫節の部を手引として私蔵の人形淨瑠璃古番附を整理したところ、同年表に記載洩れの興行番附が少しばかり出て来た。元々この年表は未定稿として發行せられたものであり、其後相當年數も經つて居るので、恐らくは色々な機會に専門家に依つて既に其の補正が行はれて来たことゝ想像せられるが、寡聞の私はそれを知らないし、又そこ迄調べる時間も資料も持合せがない。で今氣付いたものを何かの参考にもと其儘一應摘記することゝした。或は所謂遼東の豕の譏りがあるかも知れないがそれは甘受しよう。尙ほ疑問の點を附記して置いた。切に示教を俟つ。

○天明七年五月朔日「安徳天皇兵器貢」は正本に依つて記載したものと見え、太夫は四段目迄、三絃並に人形役割に就ては記すところがないが、今番附に依つてこれを補ふと次の通りである。(年表では竹本座上演であるが番附は道頓堀東の芝居となつてゐる)

竹本 杣太夫
竹本 重太夫

三絃

鶴澤 鬼市	鶴澤 清七	鶴澤 萬三	竹澤 駒吉	竹澤 新太郎	鶴澤 乙次郎	鶴澤 時藏	竹澤 鶴佐和
-------	-------	-------	-------	--------	--------	-------	--------

人形役割

梶原 景高
獵師 多角内

吉田 冠二

典侍の局
つゆはぎ
老父 重忠女

吉田 文三郎

主馬 判官
靜

吉田 文吾

梶原 平三
義經

吉田 才治

○寛政九年十月十五日道頓堀東の芝居上演「假名手本忠臣藏」は番附に依ると十一月十五日が初日正當となる。

○享和二年戊正月廿九日道頓堀東の芝居

座本 竹澤 吉太郎

「双蝶々曲輪日記」

大序 口 竹本 十九太夫

二つ目 奥 竹本 雜太夫

二つ目 口 竹本 瀧太夫

三つ目 切 竹本 磯太夫

三つ目 口 竹本 むら太夫

四つ目 奥 竹本 紋太夫

四つ目 口 竹本 武太夫

五つ目 切 竹本 綱太夫

五つ目 口 竹本 津賀太夫

六つ目 切 竹本 頼母太夫

六つ目 口 竹本 内匠太夫

七つ目道行 竹本 越太夫

七つ目道行 竹本 頼母太夫

八つ目 切 竹本 むら太夫

八つ目 口 竹本 磯太夫

「刈萱桑門筑紫轢」

三味線 吉兵衛

三味線 竹本 津賀太夫

三味線 竹本 紋太夫

三味線 竹本 雛太夫

三味線 竹本 越太夫

三味線 竹本 吉兵衛

○年表を見ると文化三年(丙寅)二月堀江市々側芝居の「菅原傳授手習鑑」「染模様

妹背門松」は文政元年(戊寅)二月の堀江市々側芝居の興行と太夫、三絃、人形全

く同一である。即ちこれは同じものが再出してゐるのではあるまいか。更らに年

表の

人形役割

濡髪長五郎
山崎與次兵衛

駕甚 兵衛
放駒長吉
治部右衛門

みやこ
おはやこ
ゆうしで

おとせ
南與兵衛
しんとう左衛門

竹澤 吉太郎

野澤 吉三郎

鶴澤 文吾

竹澤 宗七

野澤 駒吉

吉田 音五郎

豊松 定藏

吉田 千四

吉田 冠十郎

桐竹門藏

文化三年正月二日堀江々之側芝居
「新うすゆき物語」 其他

文化三年二月五日北堀江市々側芝居
「けいせい北國曙」

は番附によると只單に「寅」となつてゐるが、これも文政元年(戊寅)が正しいのであるまいか、文政元年四月の同座興行の顔觸から見てさう想像せられるのである。現に私藏の番附には前記三興行共文政元年(戊寅)と書入がある。

○文化七年午九月六日御靈社内

太夫本 豊竹多賀太夫

太夫 竹本 彌太夫

初段 豊竹 多賀太夫

口 竹本 佐太夫

奥 竹本 出雲太夫

中 竹本 定太夫

次 竹本 由良太夫

切 竹本 伊達太夫

口 竹本 定太夫

次 竹本 筆太夫

後 竹本 由良太夫

人形役割

辨御前慶吉田三吾

源八兵衛吉田正三

三郎女房吉田正三

伊勢三郎吉田冠四

森口源太左衛門吉田冠四

花の郎内谷母井豊松東十郎

喜がの土佐坊吉田紋藏

おつじ

○文化七年午九月廿七日荒木芝居

座本荒木萬吉

「假名手本忠臣藏」

大序口竹本戸太夫

二つ目口豊竹東太夫

三つ目口豊竹巴太夫

四つ目切竹本津賀太夫

竹本中太夫

五つ目後竹本加太夫

口竹本和太夫

奥竹本塚太夫

口竹本錦太夫

切竹本宮戸太夫

七つ目出語り掛合

豊竹巴太夫

竹本錦太夫

竹本津賀太夫

竹本加太夫

竹本巽太夫

竹本和太夫

竹本錦太夫

豊竹富太夫

豊竹富太夫

豊竹富太夫

かけ合

切竹本中太夫

竹本宮戸太夫

「鎌倉三代記」

三浦住家の段

三絃

豊竹八重太夫

豊竹巴太夫

鶴澤伊左衛門

三段目

奥竹本新太夫

中竹本綾太夫

口竹本鐘太夫

切竹本千代太夫

豊竹綾太夫

竹本鐘太夫

竹本彌太夫

鶴澤勝造

三味線

「花上野譽の石碑」

八幡の段竹本出雲太夫

志度寺の段竹本倉太夫

切竹本筆太夫

六つ目口竹本出雲太夫

七つ目口竹本倉太夫

口竹本新太夫

切竹本多賀太夫

三絃鶴澤彌三郎

鶴澤喜三郎

鶴澤重吉

鶴澤庄治郎

鶴澤巳之助

人形役割

竹澤 吉松
鶴澤 勇造
鶴澤 勝次郎

おかの助

吉田 金吾

由良之助

桐竹 門藏

若狭之介

豊松 國八

三浦母

豊松 國八

石な堂

豊松 國八

時なせ

豊松 國八

となせ

豊松 國八

平右衛門

吉田 新吾

高九郎

吉田 新吾

定兵衛

吉田 新吾

勘市兵衛

吉田 新吾

○文化八年(?)稻荷境内

名代 千代屋七右衛門
座本 竹本 士佐太夫

第三早打の段

竹本 十七太夫

第四順死の段

竹本 峯太夫

第五山科の段

竹本 錦太夫

第六横田川の段

竹本 重太夫

第七萱野村の段

竹本 中太夫

第八浅草の段

竹本 綾太夫

第九植木屋の段

竹本 灘太夫

第十勢揃の段

竹本 土佐太夫

第十一敵討の段

竹本 十七太夫

三絃

竹本 土佐太夫

合ケカ

竹本 中太夫

合ケカ

竹本 錦太夫

合ケカ

竹本 綾太夫

合ケカ

竹本 式太夫

「酒吞童子話」

大内御殿の段 竹本 戸和太夫

吉野山の段

豊竹 勝太夫

北野社の段

豊竹 菊太夫

是のり館の段

竹本 絹太夫

比叡山の段

豊竹 定太夫

矢瀬の里の段

豊竹 品太夫

人形役割

鶴澤 才治

喜多八

吉田 冠四

本三右衛門

吉田 冠四

早野三右衛門

吉田 冠四

李右衛門

吉田 冠四

喜多八母

豊松 重三郎

おむめ

豊松 重三郎

となせ

豊松 重五郎

源四郎

豊松 重五郎

勘平

豊松 重五郎

彌直七

吉田 文藏

由良之助

吉田 文藏

○文化十四年丁丑八月十九日京都四條芝

白茅亭雜記

富取芳河士

文久氏の袴

長谷川文久氏所持の幾組もある高座袴の中に、ツンツルテンの袴が一着ある、これが何んと昔々四十年も前に唐辛子賣りのお婆さんから貰つたといふ由緒づきのもの。

由緒といふのは、日清戦争に獨り息子を殺して、死に別れた夫の事は忘れる日があつても息子の事は忘れず、戦争さへなかつたならと明けても暮れても國を恨んでゐる唐辛子賣りのお婆さんがあつた。ところがある夜文久氏の赤垣を聴いて、今まで自分が國を恨んでゐたのは何んといふ罰當りであつたらう、倅はお國の爲めに立派な戦死をしたのである、と源藏の母が自害をする忠節に感泣して「お蔭様で自分は夢から覺めて明るい心になりました」と翌る日文久氏を訪れて、御禮に持つて來たのが倅の形見の此の袴である。

文久氏は赤垣を語る場合には必ず此の袴をつけるといふ事である。

齋藤拳三氏に藝鬼の尊稱を奉つたのは安藤鶴夫氏、僕が安藤氏に酒童と名命したら、齋藤氏は酒童は實に傑作だとほめる。酒童やつきになつて曰、然らば芳河士は酒老だと。すると煙亭氏は甘翁かな。

藝鬼と酒童

墓

今の家に移つた當時、本郷で貰つて來て庭に放した二匹の墓が雌雄であつたと見えて、翌年から小さな子供が飛んでゐるのを見受けるやうになつた。蛙はおたまじやくしから蛙になるが、墓はさうではなく初めから一定の形を具へて生れるらしい、玉子も見ないし産れる處も見ないが、小豆位の可愛のが飛んでゐる、それも澤山は産まぬらしい。此頃は大中小随分殖えて、夕方からのそれと餌を探し歩くもの、或は寛の下に泰然と構へてゐるもの思ひ／＼に動向を別にして、一見愚かなるが如く見えて中々賢しいのである。雨の日などは木の下のゐて、上から下りて來る蟻を一つ／＼呑み込んでゐる、それも大きなのは二三寸、小さなのは一寸位離れてゐて、自分の前へ來たものをじつとしてゐてべりりと舌で吸ひ込むのであるが、その早い事眼にも止らぬ。蛙は人の足音で直ぐ逃げるが墓は逃げない、頭や背中にきはつても眼をとちて知らぬ顔でゐる、腹を立てる時にはふくれぬ。

ひきかへるとどこへ行かると歩みか
のそり／＼ひきよお前はどこへ行く
ふくれたる墓よいつまでふくれぬ

雉子郎君の昇天

救世園療養所清瀨療養園事務長石島龜治郎事雉子郎君が昇天をした。雉子郎君に會つたのは古い話で、松本隨行記にも書いた信州の葦哉君を訪れて上京する途中である。雉子郎君は行田の足袋問屋の二男で當時「浮城」といふ俳誌を出してゐたが、其後東京して救世軍に身を投じ、大に出世をして山室氏の女婿となり今日に及んだもので、明治四十年頃には錚々たる青年俳人であつた。行田の離れ座敷に一泊をしてランプの蕊をかき立て、句作をした事を思ひ君の冥福を祈る。



ラジオ 淨曲漫評 金王丸



大阪 女義 (六月八日)

さわり二題

|| 加々見山と柳

絃 豊澤 住 繁
竹 本 雛 駒

「又たBKのお得意」さわり二題「か」と、新聞をよく見ると、これは晝間の海外放送を、内地のわれ〜へお裾分けといふ品物、聴いてもよし、聴かぬでもよし、とは申すものゝ、役目なれば、と折柄の閑ふさげにスウキツチを入れる。雛駒さんといふのは、我等どうやら初耳らしく、記憶が無い。「第一」は長局の中ほど、影見ゆるまで見送りて……から尾上のくどきを聴かせ、續いて、お初の例のからす啼きから晝置きのこと、一字も讀まず一散に、御門の内へと……までとるのであつた。女義としては平々凡々、最近東京の伊達子改め土佐廣の「長局」熱演を聴い

た我等を感心させる譯にはゆかず「身も浮くばかりせき上げて、前後不覺に歎きしが」など、チツトも前後不覺になつて居なかつた、アハ、である。次は「柳」の早やしのゝめの街道筋……からキヤリを二つ神妙にうたつて段切りまで、住繁さんが、それでも骨を折つて弾いてゐた。

大阪 女義 (六月十四日)

日蓮上人御法海

|| 勘作住家の段

絃 豊澤 小 住
竹 本 雛 昇

上方の女義の中でも、中堅か若手か、相當の語り手らしく、放送でもかなりお馴染の多い方である。好い聲柄で殊に音づかひに工夫もあり、この勘作など、まづ恰好のだし物であらう。最近では、カケ合の堀川で、たしか、傳兵衛を持つてゐたと覺える「お傳はあとを見送り……

會報と消息

▼綾秀會 日暮里片岡氏方にて六月十五日隣組會の催ほしに招待された綾秀會は來聴者四十名の盛會であつた

日吉(翠瓢)先代(治光)揚屋(綾登)寺子屋(壽瓢)絃(綾秀)

▼女義若女會 第廿六回を六月十五日午後六時より東橋亭にて開演。松王

邸(素八、駒登久)酒屋(駒龍、津賀昇)寺子屋(素次、駒清)鳴門(彌周、三生)辨慶(素廣、駒登久)なほ第廿七回は奥村三玉氏特許繪解き入りにて七月一日開催
忠六(素廣、駒登久)壺吹(素次、駒清)太十(綾清、駒登久)野崎(素八、駒清)寺子屋(猿春、三生)

▼三好會 六月廿日二三壽會と合同して菊川俱樂部に開催。太十(徳多

勇、三好)鈴ヶ森(のし子、二三壽)壺坂(三佐保、二三壽)鳴門(喜三香、三好)朝顔(なか子、二三壽)日吉(三好彈語り)忠六(理芳、二三壽)尙同廿六日夜牛込

：』からの、すぐ勸作の出である。亡靈になつてゐる勸作の詞は、無論難物であるが、ある程度まで落付いてそれらしくうなづける出来であつた。母親が出て、付き歎くので、お傳の『わつさりと打ち

うるほうで悦んだがよござんす……』のあたり、少しく異論もあるが、まあ／＼としておいて、老母の自害は大切りの處を懸命にやつて退けた。勸作の死を知らせに來る庄屋は、ひどく三枚目にならず實體に語られたのもよろしい。愈々本段のクライマックス『扱も／＼世の中』のお傳のクドキ『鵜の咽締めたる報ひなら……』も相當に『浪立ち騒ぐ』で終つたのだが、時間の都合とはいへ、此れでは、この淨瑠璃の筋も理窟も一切判らず唯だ『親子婦夫四人の内今日一日に三人』が非業の最後を遂げるといふ悲惨の出來事だけを聴かした事になる。後の日蓮出處、經市救助の結果を何とかしたいものではないか。小住さんの絃、例によつて太夫を威壓するやうに聴こえて確かなものと申すべし。

文樂新星〔六月十八日〕

攝州合邦辻

合邦作家の段

竹本叶太夫
絃 鶴澤寛治郎

文樂の巨星相踵いでの他界によつて、久しく第一線を退いてゐた叶太夫氏の復活第一聲である。六月の文樂座本興行に角太夫氏と一日代りのだし物になつた合邦を、けふは、舞臺中繼ではなく、特にB Kからの放送となつたらしい。攝津大掾系の古強者、どうやら近く春太夫を襲名するといふ噂もあり、文樂の巨星として迎へられる人であつて、淨瑠璃は無論本筋である。そして、尙ほ元氣もあり、艶氣も失せてはゐないから、將來、しばらくは愉しませて貰へる人である。聊かすんなりとせぬ癖のある語り口で、一般には、取つ付きが悪いかも知れぬが、耳馴れて來たら無論隨所に閃き渡る妙音に隨喜する信者も出來るであらう。後家になつた津太夫未亡人寛治郎師の再縁で、絃も相當に骨折りを見せるであらう。

亭に於ける市川三滿壽劇身振に出演。

▼中老會 中老會は六月廿四日午後四時半より淺草並木俱樂部にて開催、

折しも京都より出京中の西喜氏の爲め、沼井盛鶴氏は氏の語り場を割愛して西喜氏の出演となり、同氏は忠四を絃平の絃で語つて滿場の掲采を博した。彌作(吾鈴、絃内) 先代(奇聲、和歌吉) 帶屋前(春和、絃平) 同奥(松玉、彌國太夫) 忠四(西喜、絃平) 喜内(越巴、和歌吉) 陣屋(巽、絃平) 鰻谷(千晴、團市)

▼女子部後援會 義太夫因會女子部後援會第十七回は、六月廿八日午後四時より並木俱樂部に開催。聴衆の中には新橋演舞場に引越興行に東上した竹本伊達太夫、桐竹紋十郎の顔も見え、後れて桐竹門造も來聴、素義では中川愛氷氏を始め柳光、枝蝶、光玉、貴松氏等の佳照連に阿部一氏と高山和子さんなど巴雪會連と市菊、豊、巖若、柳汀氏等其の他の面々が應援の拍手を送り、今度兜會々長に就任した鈴木松寶氏が少し遅くなつた頃染登の寺子屋を

「しんたる夜の道……」の語り出先づはつきりして、本當の年齢からいふと、やゝ老けたかとおもふ玉手御前も、進むにつれて品位も出、艶氣も添うて相當なもの合邦のイキリ立つ例の長ゼリフも氣組がはいつて完全である。母親も氣あつかひの眞實味が充分にあらはれてよく「心のへだて聴き寄りの、眞身の誠ぞ哀れなる……」など、頗る古風な語り口でほゝゑませた。玉手の「なほいやまさる戀の

淵」もよく、母親の「今更あきれ我子の顔、唯だうちまもる」が、かなり自然に語られる。合邦の刀の鯉口の次の尼法師のくだり、これからは色町風のあたり大に飛ばして「納戸へ」まで、三十分の時間は終つた。絃の寛治郎氏は、たしか昨年暮れに、故津太夫氏で同じ合邦が放送されたやうに覺えてゐるが、叶さんとの初合せに、その感想や如何に、である。

女義 隨評

彌周と

重子

内田三千三

東京の女義中堅では、私は常に彌周猿春昇登の三人の將來を刮目して見守つてゐる。この三人から女義らしい耽美性を見出さうとするものは、失望させられるかも知れないが、淨瑠璃の幅を重厚に表現する彌周、深さに喰ひ込んで行く猿春、骨に觸れるコツを持つ昇

登、此の三人はそれ／＼の意味で持望させるものがある。言葉を換へて云へば義太夫は一生の藝として精進する眞摯さに心を曳かれる。

女義華やかなりし明治大正期には、連夜掛持しても廻り切れぬ定席が數多あつた、優れた藝腕を持つことが生活を豊かにする道へも通じてゐた、藝術と經濟が並行して前進出来る處に此時代の絢爛たる活氣と豊郁なる女義藝術の華が咲いた。而し現代女義の生活様相は極めて悪條件下に置かれてゐる、正確に云つて月一回の後援會では到底獨立の生計は維持し得ない。勢ひ女義として立つ人々の藝術

聴きに來るなど、降雨にもかゝはらず頗る滿員の盛會であつた。宿屋(佳世子、三勝)柳(越道、巴住)一つ家(小津賀、紋教)新口(綾清、駒登久)本下(光助、清二)志渡寺(猿春、三生)酒屋(福彌、勝八)寺子屋(染登、猿幸)野崎(佳照、清一、ツレ清三、佳世子)

▼旭勝會 (大連)六月例會を十日午後六時半より浪速町鈴木呉服店樓上に開催。野崎(山城)太十(旭登)宿屋(幸玉)組打(三昇)縮屋(萬華)中將姫(たむら)寺子屋(翠香)絃(旭勝)

▼三並義昌氏 三並義昌氏は豊竹駒登太夫を始め豊澤和孝並に竹糸、加代子、春日、駒榮氏等と富山に遊び、五月三、四の兩日魚津劇場に於て開催し超滿員の盛況を呈した。

▼奥村三玉氏 奥村三玉氏は六月九日横須賀佐野町東部會所にて繪解き淨瑠璃を開催。柳(三玉)太十(大光)寺子屋(二葉)絃(駒登久)にて好評。なほ氏は此繪解淨瑠璃會にて廿五日同市陸軍病院を慰問した。

相貌はこの好むと好まざるに關はらず、素養を相手の稽古を主眼に舞臺を従とすることによつて藝術生活が運行される。常設の舞臺を持たぬ經濟的缺陷はこの藝術練磨にも影響して、ともすれば躍進の夢を蝕み易い文樂の如き、強力な藝術集團を東京の男女義が團結して、一日も早く建設しないことには、安じて活潑な藝術活動に挺身することが不可能であらう。

新内流しの江戸末期的な哀調がかすかに流れて来る夜の並木クラブにふとこんなことを考へ乍ら彌周三生の「逆櫓」を聞いた。この「逆櫓」はカク云ふ「うら寂しさ」を吹き飛ばす程氣組が壯烈だつた、なまじ小ぢんまりと纏つてゐないだけに藝線の遠くしさが未完成乍ら一沐の有望さを思はせた。松右衛門が上出来で、グリーンと迫る處があるのが頼母しい、「権四郎頭が高い……」をキツパリやる、威壓的に迫る氣魄が佳妙だが「高い」……の「い」が高音の爲め力が抜ける。これと「樋の口を樋口などと……」にコクのある妙味が欲しい、明快でしつかりしてゐるが技巧でない心韻の明暗を「いぶして」出すと、こはグーッと興趣深い。「生々世々の御厚恩……」で

情理を説いてへり下る樋口、松右衛門の剛真二面の心情を浮彫にするのは良い腕である、逆櫓の講釋もユルミなく、引しめてよくやつた、お筆も静岡に迫る哀愁こそないが、艶を持たせてしつとり運ぶ足取りがこの人らしく賢明だ。「わたしの妹此津の國に……」に佳韻がある、権四郎は流石に若い、手堅くはやつてゐるが鏘が熟然と迫らない。荒海に鍊えた老船頭の素朴の氣骨がもう一息だ、三生の絃はマクレナによく弾いた、健達に急所をモリ上げたが、惜しい哉静面を弾く時鋭さが出る、心情的なやわらか味が出ると思はれた絃である。

○ 重子勝八の「酒屋」は、豫想通り時代物程深韻はない、ベタつく嫌味は少しもないが完成された藝態に、一脈の清寂さを感じさせる、サワリまで劃然と語るが、しとくと胸打つ氣韻が淡い、殊に半兵衛は不向だ、濁音の少い清麗な音律が邪魔する。

宗岸にしても枯淡味が少く、うす墨に似た酒脱な深さがほめられ挿言すれば酒屋の前半は半兵衛宗岸の對蹠的な二性格の「うれり」が期せずして恩愛の深淵へ歸納する經緯に妙隨

▼乃村乃菊氏 六月十六日軍人會館で佳照會の臨時乙女文樂開催の間際に究如病を發して入院した乃村乃菊氏はチブス性の高熱で一時は頗る憂慮されたが、此頃や、小康を得て愁眉を開くに至つた。

▼神馬里芳氏 神馬里芳さんは夫君千代吉氏と滿洲視察を企劃し、五月十九日出立先づ京城に赴き、次いで平城新義州(こゝには神馬氏の工場あり)と視察、それより鴨綠江を渡つて安東、奉天、吉林、新京、哈爾濱とまはり、哈爾濱には二三日逗留してこれより大連へ延ばして同市を始め日露戦役に於ける旅順聖地を見物して門司へ歸り、福岡の太宰府に參拜して博多へ出て六月六日發歸京した。此の留守中店員が二人も死去し、しかも出立前にも一人死去、ところが歸宅旅装を解く暇もなく今度は令弟長谷川八十治氏の永眠と續く不幸の悲しみに、旅勞れも忘れて愁嘆の日を送つてゐる。

▼靜淨會 前號に報じた靜岡縣人

がある、正直に云へば重子の老役には宗教的な無情感がじゆつくり出ない、その代りサリへ行くと斷然藝が開らいて清銳な甘美さがある、「今頃は……」でビツクリする程可憐な愁容を普出する、「半七さん……」をうら聲で味にやる、「どこにどうして……」で一寸と間を入れてハツキリ泣かずに忍び泣く風情が這

泉老人と批評

内田 富太郎

井上泉老先輩が病魔の爲め遂に黄泉の客となられた。もう一人の井上さん高齡の和風さんが艶と潤ひのある世話を髪樂と老巧に聴かせられてゐるのにひき比べて一しほ感慨深

い。
私が泉老人に初めてお目にかかつたのは「批評する會される會」が先輩河野國聲氏の肝煎で麻布の公會室にあつたおと年の秋のある夜とらる覺えてゐる。

「素人が玄義の批評することはいけな

入つて「ござらふぞ」を「はんなり」と象徴的に描出する、「お氣に入ぬと知りながら……」で怨愁を濃出せず、清い「あきらめ」を漂はすとやり方が仄濫い、勝八の絃は矢張り唸らせる貞女的情愁をカツキリ弾き乍ら其の底に潜々と諦観が流れてゐるのが摺んだ藝である。

温厚に語られた、靜調で含蓄と陰影深いその圓寂な話調が「正しい批評がより藝術を進歩させる」……と信じてゐる私に何故か反駁する勇氣を失はせた、批評の自由は聴客が持つてゐる。

義太夫は聴くだけで批評しては「いけな」と云ふ戒律はない、しかし「批評の限界性」と云ふ問題になると複雑だ。古軛を基準として素義を批評する人、津太夫を目標に玄義を批評する者、色とり／＼のさま／＼さである。

大變漠然とした云ひ方だが、良いものを定準に批評することに誤りはない、批評の據點を名人藝に、女義的な良さに、素義的な巧みに、……これも置き處に種々段階がある。藝術の實體を把握した真正の批評と云ふものは完璧の名人藝と同じくさうザラに轉つてゐるものではない、泉さんの「苦がい言葉」は我々

素義團體の「靜淨會」第一回は六月十二日より並木俱樂部で開催したが、會長山田壽瓢氏、理事時田靜史氏。竹本大隅太夫、星野桔梗氏を問顧とし、秋季大會は十月十三日同俱樂部に決定した。

▼越後行き 黒川叶、山田義昇、乾桔梗、的野關路の四氏は越路に遠征六月五、六兩日新發田榮座にて、七日は小千谷明治座にていづれも賑々しく開催して好評を博し、歸途水上湯泉に清遊して歸京。三味線は鶴澤龜造、豊竹巴住。

▼良友會 六月廿六七日神奈川縣厚木へ遠征、半原劇場にて催ほした。
(初日) 柳(松利)妙心寺(ひばり)太十(里松)沼津(三太郎)寺子屋(松寶)(二日目)太十(松利)十種香(紫道)酒屋(松寶)喜内(三太郎)鳴門(里松)絃(良造、綾清)

▼兜會花組 兜會花組は久々に六月廿八九兩日小石川俱樂部に開催した
▼國聲、操兩氏 高瀬操、河野國聲の兩氏は滿鮮旅行中の方々に語りまくつ

批評愛好者にとつて全面的な批評への否定ではなくて、義太夫淨瑠璃の至難性を揚扱した「體驗の滲じみ」と直感する。例へ素人でも淨瑠璃、三絃、人形の三位一體を完解して其の重厚な信念的完礎の上に立つた批評ならそれは良き批評と云へる。

私達未熟な若輩は、心を籠め魂に鞭打つて永遠に精進するより道はない。一見虚無的な否定に似て實は隠された深愛が底流する泉さんの言葉を幾度か胸裡に反覆しながら會を了へて闇の舗道へ、寒風に外套のエリを立てて六本木から來た濱松町行の市電へうす暗い心を乗せた。

日本橋クラブに無名會の大會があつた夜、最後はどくろさんの帶屋を懸いて出やうとすると泉老人に呼びとめられた、麻布のあの晩以來私は寄席や座談會で親密に泉さんと語り合ふ間柄になつてゐた。

つい二三日前にあつた素女會に珍らしく姿を見せなかつたことをお訊ねしたことから話が咲いて一番終ひに「私は素義の批評はない方がよいと思ひます」としみじみ云はれた。その話韻には知りつくした人の枯淡な諦

めが流れてゐて胸を衝かれた、若い頃演藝記者もされたり、又淨瑠璃を熱愛して語られたこの老人の到達した結論が既記の言葉である。無神経な私と云へどいさゝか考へさせられるものがあつた。

「私はこれまで一生懸命他人様の淨瑠璃を聴いてその缺點を直してあげようと思つて忠告したり又筆にしましたがその人は決して直しませんでした、いやそれどころか私は返つて恨らまれたり憎くまれたりしました、合はない話です全く……」と細い目を心持曇らせて寂しい笑ひを口元に浮べられて云つた言葉が妙に印象深い。

文樂手摺木版畫

文樂手摺木版畫は文樂座より發賣され、文樂人形研究家として斯界の權威者齋藤清二郎畫伯の筆になるもの、十數度刷りの手摺木版畫にて、昭和六年以來引續き刊行、第一集より第四十三集迄殆んど文樂狂言が收められ現在約百六十種に及んでゐる

定 價 一枚 拾五錢
一組包紙付 五十錢

新橋演舞場にて文樂座引越興行中は同劇場賣店で發賣してゐる。

て大もてにもて、ハルピンでは帝都無名會の大御所來哈とばかりつぼみ會の主催で歓迎會が催ほされたが、同地では廿六日放送、廿九日奉天の歡迎淨瑠璃會に出席して七月上旬空から歸京。

▼サイパンの淨界 南洋サイパン北ガラパンには元鶴澤紋四郎が行つてをり四五年前からは竹澤清に依つて二十名以上の愛義家があり「愛義會」といふ會を組織して頗る隆盛なものである。三井愛壽氏は本年三月同地へ赴き五月歸京、此間竹澤清の絃で時折り語つて愛義會諸氏とも親しみ又次ぎの再會を樂しんでゐる。

▼乙女文樂 前號既報の通り佳照會は六月十六日九段軍入會館にて臨時大會を開催し、大阪より桐竹門造指導乙女文樂を招聘したが、同會は引續き十七日より四日間毎日正午より乙女文樂入義太夫會を主催し、これには素義の語り手我も我もと出演して非常な盛會を極めた。

文樂座の引越興行

竹本津太夫、豊竹駒太夫亡き後の文樂座人形淨瑠璃は竹本角太夫、竹本叶太夫の入座に陣容を新たに整へて六月四ツ橋に於て開演をしたが、七月は角太夫、叶太夫の缺演と豊澤廣助、鶴澤寛治郎等他二三除く外全員東上、新橋演舞場に於て一日初日五回替りにて廿五日迄開演。

第一回（一日より五日迄）盲杖櫻雪社

三人座頭の段。福の市（陸路太夫改七五三太夫）徳太郎（竹太夫改雛太夫）玉の市（播路太夫）妹脊山婦女庭訓山の段。大判事（相生太夫、吉五郎）久我之助（津の子太夫改濱太夫）定高（織太夫、團六）雛鳥（伊達太夫、友衛門）近頃河原達引堀川の段。

前（南部太夫、重造）切（大隅太夫、清二郎）菅原傳授手習鑑寺子屋の段（古靱太夫、清六）關取千兩幟猪名川内の段。おとわ（呂太夫）猪名川（駒若太夫改司太夫）鐵ヶ嶽（相生太夫）

第二回（六日より十日迄）國性爺合戰
樓門の段（南部太夫、重造。伊達太夫、友

衛門）獅子ヶ城の段（大隅太夫、清二郎）紅流しの段（呂太夫、仙糸）小鍛冶（新曲）老翁實は稻荷明神（相生太夫、織太夫）宗近（伊達太夫、南部太夫）勅使（濱太夫、越名太夫）戀飛脚大和往來。新口村の段。中（司太夫、團伊三）切（古靱太夫、清六）攝州合邦辻合邦住家の段。前（相生太夫、吉五郎。織太夫、團六）後（七五三太夫、綱造）里けしき双草紙濱千鳥（雛太夫、相生太夫、織太夫）二人禿（呂太夫、南部太夫、伊達太夫、外郎冠者、大名（相生太夫、織太夫）美女（津麿太夫、宮太夫、越名太夫）醜女（南部太夫、伊達太夫）良辨杉由來志賀の里の段

第三回（十一日より十五日迄）釣女。太

郎冠者、大名（相生太夫、織太夫）美女（津麿太夫、宮太夫、越名太夫）醜女（南部太夫、伊達太夫）良辨杉由來志賀の里の段（雛太夫）櫻の宮物狂の段（呂太夫、伊達太夫、南部太夫、濱太夫、司太夫）東大寺の段（七五三太夫、吉左）二月堂の段（古靱太夫、清六）繪本太功記尼ヶ崎の段。前（南部太夫、重造。伊達太夫、友衛門）後（相生太夫、吉五郎。織太夫、團六）新版歌祭門野崎村の段（大隅太夫、清二郎）

▼**坂東勝治一座** 近頃東京地方を巡業めつきり賣り出した坂東勝治一座は七月より九月中旬にかけて北海道及樺太に出張する事になつたが、今回は同方面に多數の後援者を有し、此方面では非常な成果を収めてゐる竹澤龍造一座と合同しての賑々しき巡業である。

▼**竹本長尾太夫氏より** 此度は津太夫師の爲め絶大なる御盡力被下有難御禮申上様も御座無く實に恐縮仕候御社の御盡力にて各方面に亘り多數の諸名家皆様より結構なる御寄稿を賜りし事は亡師の追善此上無之師匠も定めし地下で喜び居らるゝ事と存候乍失禮寸楮を以て御禮申上候

▼**古曲發表會** 義太夫古曲發表會秋の大會は九月廿三日並木俱樂部に決定なほ、今回より豊澤和孝新加入。

▼**野澤道之助愛娘** 野澤道之助の愛娘（失名）さんは十三から三味線を持ち十六才の昨年杵家勝五郎に入門三之助と名乗り、僅か一年で名取りとなつてその天才を讃えられてゐる。

第四回 (十六日より廿日迄) 本朝廿四造(壺坂寺の段(呂太夫、仙糸、ツレ、團伊

孝。十種香の段(勝頼、濱太夫。濡衣、雛三、扇之助)

太夫。謙信、播路太夫、司太夫。六郎、千第五回 (廿一日より廿五日迄) 道行戀

駒太夫、隅若太夫。小文治、津磨太夫、呂の小山卷(おみわ、南部太夫、伊達太夫。

賀太夫。友衛門)狐火の段(七五三太夫、橘姫、雛太夫。求女、司太夫、宮太夫。外)

綱造、ツレ、吉左、友花、琴、綱延)花上野譽名筆吃又平。土佐將監閑居の段。中(濱

碑。志渡寺の段。中(雛太夫、喜代之助)太夫、喜代之助)切(大隅太夫、清二郎、ツ

前(大隅太夫、清二郎)後(相生太夫、吉五レ、團伊三、吉季)天網島時雨炬燵。紙屋

郎。織太夫、團六)戰陣訓(相生太夫、呂太の段。前(相生太夫、吉五郎。呂太夫、仙

夫、織太夫、南部太夫、伊達太夫。吉五郎、糸)後(相生太夫、吉五郎。呂太夫、仙糸)

重造、團六、吉季、勝芳、綱延)戀女房染分加賀見山舊錦繪。廊下の段(織太夫、團

手綱。道中双六の段(相生太夫、越名太六)長局の段(古鞆太夫、清六)生寫朝顔日

夫、吉五郎、勝之助。織太夫、宮太夫、團記。宿屋の段(南部太夫、重造。伊達太

六、清友)子別れの段(古鞆太夫、清六)壺夫、友衛門。勝芳、綱延)大井川の段(七五

坂觀音靈驗記。澤市内の段(南部太夫、重三太夫、吉左)

南北座春季公演

南北座の春季公演は築地國民新劇場に夫も又大熱演を以て人形と共に大好評を

進出、六月十六日より五日間毎夕四時よ博した。なほ五日間の語り物並びに出演

り左記番組のもとに華々しく開演したが太夫は左の通りであつた。

座長池田三國氏の努力の現れは連日立錐(初日)先代、小磯、太十、帯屋、道行

の餘地もなき満員の盛況を極め、出演太春の富士(二日目)山別、辨慶、吃又、

逆櫓、廿四孝(三日目)草履打、長局、紙治、市若初陣、道行春の富士(四日

目)組打、竹雀、油屋、壺坂、廿四孝

(五日目)柳、八陣、堀川、日高川……太

夫(彌國太夫、駒登太夫、巴太夫、朝見太

夫、卯太夫)三味線(芳太郎、猿喜知、猿藏、

團市、宗之助、美之助、絃平、絃内、和孝)以

上順不同。

河野國聲・高瀬操氏

歡迎淨瑠璃會

河野國聲、高瀬操氏歡迎淨瑠璃會がハルビンつぼみ會主催で六月廿四日午後五時より丸商四階ホールに於て催はされた鳴門(大昇)日吉(井筒)宿屋(貴鶴)忠六(松風)酒屋(加十)太十(素洲)帯屋(翁寺子屋)國聲)新口(操)大切忠七掛合(由良之助、大昇。伴内、翁。九太夫、松風。お輕、操。平右衛門、國聲)絃(力三郎、仙廣)なほ奉天にては吉野井筒氏宅にて盛大な歡迎會が開かれた。

旭勝會

大連に於ける竹本旭勝連の旭勝會は六月十七日より三日間常盤町社會館講堂に

て春季大會を開催、番組左の通り。

(初日) 壺坂(山城)玉三(うろこ)柳(華玉)野崎(津玉)赤垣(璃松)合邦(泉)(二日)鳴門(旭登)寺子屋(湖東)鮎屋(萬華)沼津(翠香)絃(旭勝)

細川 清・中田五口氏

兩大祝賀義太夫會

今春第卅四回東都五十義會にて細川清氏は東大關に、中田五口氏は西大關に躍進、榮譽を勝ち得た兩氏は七月三日正午より淺草松屋ホールに於てその祝賀義太夫會を開催した。番組左の通り。

太十(掛合)十次郎、正鳳。初菊、喜鳳。さつき、其柳。久吉、旭。操、玉寶。光秀、巽(宿屋)梅雪(安達)巽(儀作)つばめ(忠原)にて祝宴を開いた。

十喜和會夏季大會

豊澤廣助連の十喜和會は七月十四日午後一時より並木俱樂部に於て夏季大會を開催。子供、御台、若君、平茶(淡路)陣屋(北斗)酒屋(玉鳳)新口(あるを)夜又王(素鳳)阿古屋(彌生)辰橋(山生)十種香(紫蝶)本下(義昇)佐太村(軌外)質店(平

寺子屋(松王、北斗。源藏、軌外。千代、あるを。戸浪、玉鳳。玄蕃、淡路。百姓、茶)大切。堀川(お俊、淡路。傳兵衛、義

昇。母、彌生。與次郎、山生。おつる、あるを)絃(廣助) 助演(仙十郎、鹿重、吉和)

綱八追善會

今より七年前、豊澤松太郎妻女のお通夜に行つてその席で發病して死去した綱八は、此頃故人となつた竹本津太夫とは兄弟の盃をした仲であり、又新橋小松家の女將とは義兄弟でもあつた。角界では有名なもので、梅の花といふ力士を養子分とし家號も相模家とて新橋では古い藝妓家であつた、片山つばめ、嵐司光氏などは綱八の藝を讀えて大に稽古したもので、七十五から義太夫を始めたといふ今は故人の木下呂壽氏などもそれである。追善會がしたいと頻りに言つてゐた津太夫も今は亡く、今回文樂座の東上を機會に小松家は津太夫の息竹本濱太夫と二人で施主となり七月廿六日午後一時より並木俱樂部でその追善義太夫會を開催する事になつた。なほ當日は手向草として濱太夫播路太夫も語り、鶴澤寛治郎も焼香を兼ねて濱太夫を弾くべく上京するとの事である。

當座帳

▽須川菊一氏 福岡市新柳町の郷里へ轉居。

▽濱村米藏氏 中野區鷺ノ宮一丁目二八番地へ轉居。

△藤田しげ子氏 故人となつた豊竹巖太夫妻としげ子さんは淺草千束町二丁目八〇番地へ轉居。

▽岸竹史氏 目黒區下目黒一丁目一二四番地に新築移轉。電話大崎二四一六番

△井上巽氏 立川にて新居新築中の處此頃落成。

▽沼井盛鶴氏 市川市市川一丁目へ轉居
▽沼井盛香氏 同上。

寄贈新刊

- ▼梨園▼サンデウ▼藝術▼淨曲研究▼淨曲新報▼淨瑠璃雜誌▲大日本淨瑠璃界▼
- 露▼みどり▼寶塚月報▼白塔

御見舞
北九州山陽方面の愛讀者諸氏へ過日の豪雨御見舞を申上候

太棹社

編輯後記

★六月は三都聯合の大會を皮切りに、土佐廣の改名、佳照會の臨時乙女文樂大會、南北座の公演、淨雲會大會、さては翼賛會、淨聲會の誕生と次々間斷なき大盛況で、今月文樂座の東上はどつきりを承つた感があります。

★五、六月にかけて神馬里芳、河野國聲、高瀬操氏等の滿鮮旅行、五十義會の松本行、山田義昇、黒川叶、的野關路氏等の越後行絃平連諸氏の長野、良友會の厚木と大分に遠征義太夫會も盛況でありましたが、御旅先きより何卒皆様の御通信をお願いしたいのであります。

★本號から表紙繪を齋藤清二郎氏にお願ひ致しました。同氏は春陽會の會友で録々たるもの、その筆意は本號の表紙を御覽下さい

★宮尾しげを氏は來月から挿繪に獨特の筆をふるはれる事になってゐます。
★齋藤金太郎氏は御多忙の爲め又本號も「義太夫と新體制」を休筆。
★そろ／＼猛夏がやつて來ます、偏に皆様の御健勝を祈ります。
一 芳河士一

(行發日十回一月毎) 號七廿第

定	一部金三十錢	郵稅五厘
一	六月分金一圓八十錢	郵稅共
價	一年分金三圓	郵稅共
告	廣通	金貳拾圓
料	特一	金參拾圓
特	別一	頁
		金參拾圓

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割増

昭和十六年七月七日印刷納本
昭和十六年七月十日發 行

東京市小石川區音羽二丁目二四

編輯兼 富取 壽鹿
發行人

東京市牛込區早稲田町五八

印刷人 栗原 榮松

東京市牛込區早稲田町五八

印刷所 栗原印刷所

電話牛込一四五二番

東京市小石川區音羽二丁目二四

發行所 太棹社

振替東京三一七八五番

定價金參拾錢

昭和十六年七月七日印刷納本
昭和十六年七月十日發 行
(毎月一回) 十日發行
第三種郵便物認可

太棹 (第百廿七號)